

## 巻頭言 「主に向かって歌え」

宇野 元

「妙なる5月」(ハインリヒ・ハイネ)は終わりましたが、爽やかな数週にこれを書いています。木々の葉はみずみずしく茂り、季節の花が色とりどりに咲いています。街を歩いている、思わず、ここにあることは素晴らしい、と叫びたくなります。美しい自然にふれるのと同じように、歌や音楽は、私たちの心に大きな喜びを与えてくれますね。歌と音楽——それは、神が私たちに与えてくれた賜物であり、それゆえ、ゆだねられた贈りものです。これらによって、神をほめることができる、また、人々を招くものとなるからです。「新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた。」(詩編 98,1)

初代のクリスチャンたちが、早くから自分たちの歌を持っていたことは、特筆すべきことです。彼らは作詞をおこない、その内容に見合った音楽のかたちを見だしていました。集会をひらく日は、主の日、すなわち日曜日に移され、イエス・キリストにある神の顧みが、歌においても表現されるようになりました。この始まりから、キリスト教会の歌が発展していったわけです。宗教改革 500 年に当たる今年、マルティン・ルターのこの領域での貢献にも光が当てられるとよいと思います。彼の時代に、彼自身が作った曲を含む新しい讃美歌集が出版されました。そこからプロテスタント教会の音楽がはじまり、優れた讃美歌作者と作曲者を輩出して、コラールや、ジュネーブ詩編歌、さらに英米の多様な讃美歌、また他の国の讃美歌が生まれてゆきました。バッハのカンタータや受難曲もこの流れの中にあります。賜物の豊かさを感じると共に、私たちに手渡されている財をそれにふさわしく受けとめ、用いたいものです。

詩編の呼び掛けは、「季節はずれ」に聞こえる折があるかもしれません。私たちの人生の季節は移りやすく、晴れと思えば、曇りに変わります。雨が長くつづくときを経験します。試練の時があり、困難な季節があります。またときおり、寄る辺ない世界の反響が、けたたましく響くのが聞こえるようです。芸術家たちは、それを敏感に感じ取って仕事をします。音楽の分野においても。そして多くの現代の作品が、世の不安を忠実に証ししています。けれども、かつて異国において、それこそ、寄る辺なく、不安な状況に置かれていた民が呼び出されたように、素晴らしい仕事が私たちに贈られています。キリストにおける神の愛を証しする群れでありなさい。賛美の歌によって、私たちの思いをこえるしかたで、神の近さが触れてきます。みずみずしい命にあふれる自然に、胸がときめくように。木や、花や、山や、雲が、イースターの輝きを照り返すように。